



TITLE:

質疑

AUTHOR(S):

CITATION:

質疑. 天界 1940, 20(234): 401-401

ISSUE DATE:

1940-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168073>

RIGHT:

質 疑

問：“シーイング”は如何にして定めるのですか？（P 星）

答：“シーイング”の決定法には2種類ある。即ち、(1) 望遠鏡内に見える星の集點像及其周囲を取巻く干涉輪の形状及動搖に依つてスケールを決定する方法と、只、(2) 見掛けの星像の鮮鋭度、或は遊星表面の模様の見え方に依つて各自のスケールを決定する方法、の2つである。

前者(1)は、ピケリングの標準スケール (Standard Scale of Seeing) と稱し、例の火星及月の観測で有名な W. H. Pickering に依つて13屈折望遠鏡を基準として決められたスケールで、口径に應じて係数を加減する事に依つて標準のスケールが算出出来ますから、協同観測の場合等は頗る便利且つ安全な方法と申せませう。只、遊星面観測に當つて、直接遊星自身では決定出来ず、其附近(同高度)の恒星に依り決定しなくてはならない不便がある。スケールと口径別に加減すべき係数については、“天界”第217號の第224頁を参照され度い。本會觀測部でもこのスケールを採用してゐます。

次に(2)の方法は、例の遊星面観測の權威アントニヤデヤデニング等の使用する方法である。上の“標準シーイング”が、各自比較し合ふ事が出来るに比して、此の方は直接比較する事が出来ない點が缺點だが、直接遊星面の模様の見え方に依つてスケールを決定出来るから、一面遊星面観測者には簡便な方法と云へる。要するに、各自独自のスケールを決めておけば良いので、例へば… Very Good, Good, Moderate, Poor, Very Poor の5階級でも良いし、又7階級、10階級に分けても良い。見掛けの星像の動搖、鮮明度に依るのだから、標準スケール等多階級に分ける必要はあるまい。

この方法は、一見不確實極まる様だが、多年續ける事に依つて、恰も變光星観測に於ける光階の如く、各自一定のスケールが決つて来るから、尠く共、自分の記録に對しては案外正確な結果が出るものである。尙、このスケールによる場合は、見取圖なり記録なりの餘白に自己獨特のスケールを併記しておかなくては、其記録は正式に受理されない。（伊達）

諸國の天文學者の消息

ポーランドのクラカウ大學天文臺長 T. Banachiewicz 氏と臺員 Wilk 氏とは他の約170名の學者と共に、ドイツ軍に抑留されて、Sachsenhausen 村（ドイツ國ヘッセン州の一寒村）にゐたが、最近、バナシキツ博士は、年齢40以上であるため解放された。しかし、キルク氏は解放されず、遂に抑留中に死亡した由。キルク氏は新彗星の發見などにより、ひろく知られてゐた人である、